

学位審査報告書

(ふりがな)	さいき りょうこ
氏 名	齋木 涼子
学 位 (専攻分野)	博士 (文学)
学 位 記 番 号	文博 第 486 号
学 位 授 与 の 日 付	平成21年11月24日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	文学研究科 歴史文化学専攻
(学位論文題目)	
平安時代の宮中宗教儀礼と天皇像	
論 文 調 査 委 員	主査 教授 吉川 真司 副査 教授 藤井 譲治 副査 教授 勝山 清次

氏 名	さい き りょう こ 齋 木 涼 子
-----	-----------------------

(論文内容の要旨)

本論文は、平安時代の宮中宗教儀礼において11世紀前後に見出される画期に着目し、儀礼が変化する過程とその意義を考察することにより、天皇像の変遷を明らかにしようとしたものである。近年、中世的天皇像が盛んに論じられる一方で、律令制度の頂点にあった古代天皇からの変質に関する議論が欠落していることに鑑み、本論文では平安時代における中世的天皇像の形成を具体的に論じている。その際、古記録や儀式書のみならず、聖教や巻数・表白などの修法記録、『覚禅鈔』『三僧記類聚』などの聖教類、さらには神道書などを、歴史史料としての検証を十分に行なった上で積極的に使用している点も、本論文の大きな特色である。論文全体は、研究史をまとめたうえで課題を提示した序、全体の総括となる結語のほか、全4章から構成される。

第一章「後七日御修法と「玉体安穩」—11・12世紀における展開—」では、御齋会と同期間である正月8日より7日間、東寺長者を中心とする真言僧によって、大内裏の真言院で行なわれた後七日御修法の変遷を論じる。従来の研究において、御修法は空海によって創始された「玉体安穩」のための特別な国家修法、すなわち天皇の身体護持を第一に掲げた護国修法と位置づけられてきた。しかしその一方で、9～11世紀の御修法に関する記録は乏しく、社会的な関心は低かったとの指摘もなされている。そこで論者は、改めて御修法の実態と変化、時代ごとの評価や位置づけを検証することで、「玉体安穩」の修法という理解を再検討し、国家修法として求められる役割の変化を追った。その結果、御修法の内容や位置づけは創設以降変化しており、評価も各時代の政治的・社会的状況に左右されていたことを解明した。特に11世紀以降になって「玉体安穩」が御修法の役割として明確に打ち出されるようになり、12世紀に入ると院政期に顕著な密教重視・如意宝珠信仰などの要素と相俟って、院や貴族層から大きな関心を寄せられるようになった、と指摘する。従来の研究では、豊富に残されている12世紀以降の仏教書・聖教の記述内容

に、空海による創設という特徴的経緯を直接結びつけ、「玉体安穩のための護国修法」として成立したとの解釈がなされてきた。論者は、歴史的な変遷を無視するこのような解釈は、各時代における儀礼の位置付けを見誤らせ、そこに反映される天皇観や国家像をも混乱させるものと批判し、9世紀に創設された国家修法が11～12世紀に変質を経ていたことを強調した。さらに、その背景として真言僧の活動や、支配者層の意識の変化があったことをも指摘している。

第二章「仁寿殿観音供と二間御本尊一天皇の私的仏事の変貌一」では、内裏で行なわれた天皇の私的仏事である仁寿殿観音供（十八日観音供）と、天皇御本尊と呼ばれた宮中の仏像の問題を論じる。仁寿殿観音供は由緒が明らかでなく、また「（清涼殿）二間観音供」といった名称も存在するため、長らく実態不明の仏事とされてきた。しかし論者は、各時代の史料を丁寧に分析し、この観音像が本来は天皇の私的な信仰対象であり、種類・素材なども天皇個人の意思を反映させて造られたものであることを解明した。やがて11世紀に入り、真言僧が天皇護持の役割を重視し始めると、観音供は真言僧が勤仕すべき重要な役割の一つとして強調され、公の仏事としての性格が強くなっていく。そして11世紀後半以降、内裏焼亡の多発や里内裏への頻繁な移動によって、観音像は天皇の身边から真言院など真言僧管理下へと移されるが、ちょうどこの頃から清涼殿二間に仁寿殿観音像とは別の仏像が安置されるようになり、後の「二間御本尊」となっていく。さらに12世紀になると、天皇の御本尊や観音供の教説的解釈・意義付けを行おうとする真言僧らの積極的な動きが見られるようになり、実態とは乖離した複雑な解釈が諸派で形成された。論者はこれらの言説について、即位灌頂に代表される中世的天皇像の形成にも関係しており、天皇御本尊である観音像の存在がこうした思想の醸成に大きな役割を果たしていたと結論付けた。

第三章「十一世紀における天皇権威の変化一内侍所神鏡と伊勢神宮託宣一」では、11世紀に起こった天皇権威の変容に関わる事象として、内侍所神鏡と伊勢神宮に関わる儀礼・意識の変化を論じる。論者によれば、天皇権威の象徴、三種の神器の一つとされる内侍所神鏡はもともと三枚存在し、大刀契とともに温明殿に収蔵され

ていたが、劔璽とは異なり、平安時代中頃までその実態がほとんど明らかにならない。しかし、10世紀後半から11世紀にかけて内裏焼亡が度々起こり、宝物が焼損の被害に遭うなかで、重要な宝物としてその存在意義が注目され始めた。やがて11世紀半ばに神鏡が完全に損壊することにより、かえって天照大神の分身という性格が確立し、神聖化と特別視が決定的になって、内侍所神楽・天皇御拝という祭祀形態が確立した、とする。さらに同じ頃、伊勢神宮の託宣が多発するようになるが、そこには朝廷や天皇の不敬、神宮への待遇の悪さに対する批判が含まれると同時に、天照大神と天皇の結びつきが強調されていた、とする。そして、神鏡の損壊・焼失と神宮託宣が同時期に重なることにより、朝廷内には伊勢神宮・内侍所神鏡に対する意識の変化が起こり、皇祖神としての天照大神、その子孫たる天皇という認識が強まっていったと結論づける。論者はその上で、これらは同時期に進行していた天皇の地位の理念化、政治的・象徴的な天皇像の形成という動きと軌を一にするものであったことを論じ、諸勢力によって新たな天皇権威が利用されることで、さらに理念化が促進されたと推定している。

第四章「仏教的天皇像と神仏習合—仁寿殿観音像・即位灌頂—」では、仁寿殿観音供に関する真言僧の言説の解明を糸口に、11～12世紀を通じて創出された天照大神・大日如来・天皇などを一体化する習合思想の展開・受容と、仏教的天皇像の形成について論じる。すなわち、観音像をめぐる複雑な言説は、一見荒唐無稽なようでありながら教義的な基盤が存在し、それらを複雑に組み合わせ、時には神祇的要素を取り込みながら形成されていた。真言僧らによって創出された複雑な習合思想は、当時寺社を対象に展開していた神仏習合とは関わりがないようにも見えるが、真言僧・天台僧・神官らの著述には共通する要素が多く、相互に影響を受け合いながら成立していったものであった、と述べる。そして論者は、こうした思想が貴族社会においても受容されており、天皇を仏教的に位置付ける基盤が徐々に形成されていたが、それが即位式において大日如来の印を結び、天皇と大日如来が一体になることで「顕密仏教界の頂点としての天皇」を生み出すという中世的即位儀礼、すなわち即位灌頂の形成につながったと推定する。治暦4年（1068）、後三条

天皇が即位時に行なった所作が即位灌頂の濫觴であるが、実修が確認できるのは13世紀後半、恒例化に至っては南北朝になってからと考えられてきた。しかし論者によれば、後三条天皇の事例が12世紀以降も語り継がれ、注目されていたことは明らかであって、約200年の間に教義的解釈や儀礼の内容がまとめられていった点こそが重要である。そして、先に指摘したような思想基盤が社会的に受容されていたからこそ高い関心が持たれ、理論が形成されていったと結論付けている。

結語では、全体の論点をまとめ、11世紀前後に起こった宮中宗教儀礼の変質を総括する。天皇像・天皇権威の変質を11世紀から検討したことは、平安時代の政治・社会・儀礼研究のみならず、中世的天皇像の解明には有効であり、論者の分析手段や研究成果が、古代・中世の天皇論に新たな視角となる可能性が述べられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、平安時代の宮中儀礼、とりわけ天皇に直接関わる宗教儀礼を分析することによって、中世的天皇像の形成過程を明らかにしようとしたものである。全体は本論4章から構成され、その前後に研究史を整理して課題・方法を述べた序と、総括と展望を示した結語が配されている。

平安時代史の研究はここ四半世紀の間に大きく進展した。古記録や儀式書を活用し、儀礼・政務とその執行体制を注視することによって、政治・財政システムを中心として古代から中世への移行が論じられてきた。近年では殊に宗教儀礼研究の深化が著しい。仏教・神祇に関わる儀礼は平安時代に本質的変容を遂げ、中世へと継承されていった。それとともに天皇は新たな宗教的権威をまとい、理念化・抽象化された天皇像が形成された。この変化は国家・社会の中世化を考える上で重要な論点となるものであり、そのため新しい研究が積み重ねられている。

論者はこうした研究動向に棹さし、天皇に直接関わる仏教・神祇儀礼を検討して、11世紀に変化の画期を見出した。そしてその要因として、教義・言説における真言僧の主導的役割を指摘するとともに、政治・社会の総体的変化との連関について論じた。しかし、変化の時期と背景を明らかにしたことだけが本論文の意義ではない。そもそも宮中の深奥で行なわれた宗教儀礼は、実態の認識そのものがきわめて困難なのであるが、論者はこの隘路を突破すべく、同時代の古記録・儀式書のみならず、中世の聖教・口伝・修法記録・神道書などを遡源的に活用した。周到かつ的確な史料解釈によって神秘のベールは取りはらわれ、仏教・神祇儀礼の実相が明らかになるとともに、脆弱な身体と抽象的な機能に分裂した天皇の姿が現われてきた。以下、本論文の顕著な成果をかいつまんで述べる。

第一章「後七日御修法と「玉体安穩」」では、毎年正月に宮中真言院で行なわれた後七日御修法の変遷を論じる。この仏教儀礼は空海が「玉体安穩」のために始修したとされてきたが、論者によれば、9～10世紀には護国全般を祈念する法会で

あった。しかし11世紀以降、真言僧が「玉体安穩」を強調し、それが「脆弱な天皇」の護持という要請に応えるものであったため、御修法の位置づけは一変し、貴族社会の注目を集めるようにもなったという。仏教史料を丹念に読み解いて常識を打破し、仏教儀礼と天皇像の歴史的変化を解明した注目すべき論考である。

第二章「仁寿殿観音供と二間御本尊」では、毎月の天皇仏事である仁寿殿観音供と、天皇御本尊と呼ばれた仏像の関係を論じる。観音供はこれまで実態が判然としなかったが、論者は9世紀から内裏仁寿殿に観音像が安置され、念誦されていたことを究明した。11世紀には観音供が真言僧の重要な役割となるが、度重なる内裏焼亡などにより、観音像は真言院に移された。この頃から天皇個人の「御本尊」が別に清涼殿二間にまつられるようになり、仁寿殿観音像との関係をめぐって複雑な教義・解釈が生み出されたという。本章でも歴史的変遷が詳細に跡付けられ、天皇と仏教をめぐる中世的観念の形成過程が明らかにされている。

第三章「十一世紀における天皇権威の変化」では、内侍所神鏡と伊勢神宮に関する儀礼と意識の変化を論じる。内裏内侍所には天照大神の御魂代とされる神鏡が安置されていたが、内裏焼亡を契機として貴族の関心が高まり、11世紀には天皇親祭が始まった。このころ伊勢神宮の託宣が多発したと相俟って、天皇は皇祖神天照の子孫であるという認識が深まり、天皇の地位の理念化・象徴化にも影響したことが述べられる。神鏡が原形を失うまで焼損を重ねるさま、その中でかえって天皇・貴族の信仰を集めていき、新たな天皇像創出につながったという過程が見事に復原されており、今後この分野の研究の基礎となる論考と言える。

第四章「仏教的天皇像と神仏習合」では、11～12世紀を通じて創出されていた天照大神・大日如来・天皇などを一体化する習合思想と、それを通じた天皇像の形成を論じる。論者によれば、宮中を舞台として真言僧が形作った複雑な教義・言説は、当時の日本社会に幅広く展開していた習合思想と連動するものであり、神祇的要素を盛り込みつつ仏教的な天皇像を確立させ、それが中世の即位儀礼である即位灌頂の創出をもたらしたという。第一章から第三章までの実証成果を基礎として、中世的天皇像の理論的基盤を明らかにした論考である。即位灌頂が段階的に整備さ

れたことを究明した点とあわせ、中世史研究に与える影響は大きい。

このように本論文は、平安時代の宮中仏教儀礼の実態を復原するとともに、11世紀が中世的天皇像の形成における画期であることを解明した研究として高く評価できる。中世のさまざまな宗教史料の活用手法は巧妙であり、史料論としても見るべきものがある。宗教儀礼・天皇像の変化が政治体制の推移とどのように関連していたか、具体的に述べられていない点が物足りないが、それは論者の今後の研究課題とすべきところであり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2009年9月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行なった結果、合格と認めた。